

Title	<書評>ハワード・ヒバード著 中山修一/小野康男訳 ミケランジェロ 法政大学出版局, 1986年4月(初 版)
Author(s)	向井, 正也
Citation	デザイン理論. 1986, 25, p. 125-128
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52610">https://doi.org/10.18910/52610</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 書評

ハワード・ヒバード著  
中山修一／小野康男訳

### ミケランジェロ

法政大学出版局，1986年4月（初版）

訳者の中山氏は本学会会員，神戸大学教育学部助教授で専攻はデザイン史，小野氏は神戸大学大学院博士課程文化学研究科在学中で専攻は芸術学。それぞれの道で秀れた2人の学究の協力の妙が，わが国におけるミケランジェロ研究に大きな一石を投じたことを慶びたい。よくこなれたわかりやすい文体で，内容の興味も手伝って，すこぶる快調に，息つくひまもなく終りまで読み通すことが出来た。長年ミケランジェロにこだわりつづけて来たものとして，近來めずらしい収穫としてよるこびにたえない。

著者のヒバード氏はアメリカの美術史家で元コロンビア大学教授，1928年生まれだが1984年に死去している。原著はミケランジェロ生誕500年を記念して1975年に初版が出たが，その後すこし補足訂正を加えた上で1978年ペリカン・ブックスからあらためて出版されている。本書はこれを底本にしたものであるが，訳業の進行中，1985年に改訂版が出たので，訳者は早速この決定版による補足，訂正をとり入れるという念の入れ方だが，一方著者にしても死の直前まで自著の完成に気力をふりしぼった事実は，訳者もいうように全く頭の下がる思いがする。それだけに本書の出来栄はさすがに在来の類書とはちがった数々の長所によって特徴づけられている。まずかねて世評も高いヒバードのミケランジェロ研究の顕著な特徴である巨匠自身の手紙からの，きわめて広汎にわたる引用はもとより，G. ヴァザーリの「ミケランジェロの生涯」（1550年版）や，A. コンディヴィの「ミケランジェロの生涯」（1553年版，1568年版）等，巨匠の在世中，或はそれにきわめて近い時点での全時代の人たちの証言を存分に活用することによって，在来の伝記や研究にみられぬ現実感で巨匠の人間像にせまるとともに，芸術論としても全く新しい視座からのアプローチに成功している。その点本書は扱い方次第では学術書としてはもとより，一般の伝記物

としても通用しうる複合性をもつもので、筆者のごとき「建築関係」を除いてミケランジェロの芸術には素人同然の者をも惹きつけてはなさないだけの読物としての魅力をも兼ねそなえている。これは本書の訳文のよさによるところも大きいと思われるが、何より注目されるのは、前述のように著者がきわめて実証的な手段によってミケランジェロの芸術にアプローチを試み、この「神の如き」巨匠を地上に引きおろして謎のヴェールをはぎ、その人間的で世俗的な側面を容赦なくあばき出していることである。特に在来の美術書が、往々表相だけのきれいごとに終始して来た巨匠の作品の創造過程において、その裏づけとなる社会経済的背景をめぐる芸術家の内面を照らし出し、赤裸々な人間ミケランジェロを浮彫りにしている点が注目される。もっとも人間ミケランジェロについては、これまでもしばしば伝記作家によって、巨匠の苦悩やジレンマ、傷心や労苦などについて繰返し語られて来ているが、それらのほとんどは、どこまでも天才ミケランジェロに対する畏敬の立場に立つものだったのに対して、著者はむしろ反対に、ミケランジェロを相対化して、その人間性のマイナスの面をも批判的にクールな描き方をしている。

次に本書の特徴と思われるものは、その目次の構成である。ここではミケランジェロの全生涯に亘る人と作品の発展の歴史的過程の節目節目が、各章、節として巧みに区分配列され、それぞれの表題にその年代を表示するという念の入ったやり方で、読者は目次を見るだけで、いわば簡単な年表を見るかのように、波乱にみちた巨匠の芸術的生涯を大づかみに展望することが出来る。

一方本書は美術書としても、ミケランジェロの全生涯に亘る目ばしい作品を経時的に網羅しており、その本文での解説には必ずイラストがつき、それらが200をこえる豊富な写真や図面として巻末にまとめられているという周到さである。ただ作品の解説にはかなりムラがあり、時として詳細に亘り過ぎたり、簡略にすぎたりするきらいはあるがこれは著者が重要と思う作品について重点的にのべようとするからだと思われる。

その内容の批判については門外漢の私としては、本誌上でも他日誰か適当な人にやっていただくとして、ここでは私が本書で何よりも問題だと思うことをひとことのみおささせていただきます。それは著者が本書の構成に際して、どうしたことかミケランジェロの全芸術のなかで、「建築」だけを特に端折った扱い方をしているということである。

これはもとより著者が意図的にやったことなので、本書の緒言のなかで、ミケランジェロの建築については、ジェームズ・アッカーマンの見事な著作があるので、「建築の分野は他の分野に比べ少々割愛して論じました。もっとも主要な建築作品につきましてはその限りではありません」とわざわざ断っている。こうした点に限って私は、本書が他の面ですぐれていればいる程一層失望を感じざるを得ない。アッカーマンの著書（中森義宗訳

「ミケランジェロの建築」彰国社、1976、初版）は原書の初版が1961年と、もはや4半世紀も前である上に、もの見方や歴史観なども本書とは全く異っているはずで、これをもって本書の不備を補うことなど到底可能とは考えられない。著者ともあろう人が一体どうしたのであろうか。

私がミケランジェロにこだわりつけて来たのは、彼をとりまく時代の文化的状況がポストモダンの現代とかなり併行的な、いわゆるマニエリスム的なものであり、彼自身の芸術も、初期の一時期は別として、その特質はあくまで古典主義に対立するマニエリスムとして、それは年を追うにつれますます顕著になって行ったと考えられるからである。著者もまた、こうした20世紀の新しい芸術観に基いて、本書においてもミケランジェロの芸術（彫刻、絵画）に見られるマニエリスムの表現に注目しているように思われる。それならなおのこと、「建築」は割愛など出来る筈はないのだが。何故なら「建築」は著者自身もいうように「年老いたミケランジェロにとって、主たる表現手段になった」といえるからである。ところで、問題は、アッカーマンがその著「ミケランジェロの建築」に何らマニエリスムを見出していないのは当然として、著者もまた本書のなかでの、ミケランジェロの建築に関する限りどうやらマニエリスムを見出していないと思われることである。たとえばミケランジェロの建築におけるマニエリスムの作例の一典型とされるラウレンツィアーナ図書館リセットの前室の解説などを見ても、著者はアッカーマンのそれとそれほど大差のない記述に終わっている。こうしたことから考えられることは、著者が巨匠の彫刻や絵画についても、少なくともその造形精神を解明する上ではマニエリスムを重要な概念とは考えてはいないと思われることである。すなわち著者は本書において、マニエリスムを巨匠の造形の単なる様式的特性として、これを表相的に取あつかうに止まっており、これをマニエリストとしての巨匠の造形精神に根ざす、その芸術全体にからむ概念とは考えていないと見られる。

たとえば著者は、ミケランジェロのマニエリスム思想の典型的なあらわれとしての、「勝利」像を頂点とする「身を振る」カタチ＝「蛇状曲線形」を初期以来くり返し作品面でとりあげながら、これを「マニエリストと呼ばれる芸術家たちにとって基本となったある理想の表明」などといった風に、つき離れた見方に止まっている。また、既に初期段階から巨匠の人間形成の上でマニエリスムの思想と切り離し得ないと思われる「新プラトン主義」などについても、コトバとしては出て来ても、それがいかなる意味内容のものかについては、何の説明もなされていない。ましてカタチの上で、そうした特性的なあらわれをくり返さない建築におけるマニエリスムにおいておやである。

私の特殊な片よった立場からの、すこし場ちがいの、著者なきあとの「無いものねだ

り」的な批評はこれくらいにしておくとして、最後に、原著の不備を補う意味でお願いしておきたいことがある。それは学術的な意味とは別に啓蒙の書として見た場合、本書はわが国の一般大衆には到底通じない専門用語がナマのままではしばしば出てくるということである。前記の「新プラトニズム」などもその一例だが、そうしたものを解説する配慮が著者に欠けていたことはまことに残念で、その点訳者はそうした不備を訳註によってかなりカバーしてはいるのだが、まだまだこれくらいでは不十分だと思われる。特に、これまた私の専門の立場からだが、建築関係の専門用語の理解には、時として単に言葉だけでは不十分で、図解を必要とするものであることを是非つけ加えておきたい。どうか周到をきわめた亡き著者の意を<sup>そんたく</sup>付度する上でも、次の機会には是非上記のような点を十分考慮に入れて補足改訂を加えていただきたいものである。

(向井正也)